

いい教科書をつくろう

齋藤 栄二（平安女学院大学教授）



「いい教科書をつくろう！」*NEW CROWN*の編集陣の願いは、その一言に尽きる。私個人としても、20年以上にわたって、その願いのために全力を尽くしてきた。そして、そのためにこそ30人以上よりなる編集陣一人ひとりが努力を積み重ねてきたのである。

それでは「いい教科書」とはどんな教科書なのだろうか。私は、それは何よりもまず「世界中には、人の心の豊かさ、悲しさ、つらさ、そして楽しさを、いきいきと表現していることばがある。そういう生きた人間の心のメッセージを生徒に伝える教科書」ということだと思う。そういうメッセージを、やさしくわかりやすい英語で若き世代に伝えることこそが、私たち教科書をつくる者とそれを使っていく英語教師の責任ではないだろうか。

私は、過日ある英語教育研究会に講師として呼んでいただいた。そこではまず日本人教師と外国人講師のチームティーチングの授業があった。授業の前に指導案を見せていただいて、私はドキリとした。興奮したのである。なぜなら指導案の最初の本時の目的のところに、次のように書かれていたからだ。

- (1) To have students know about Sudan.
- (2) To have students know about hunger and the circumstances of children in Africa.
- (3) To have students think about the issue of humanitarianism and journalism.

私は、本時の目的のところにこういう文が並べられているのを見たのはおそらく初めてである。なぜ興奮したのか。私はかつて雑誌に次のように書いたからである。

「同僚の教師諸君！いつの日にか、あなたが書く授業案のトップに＜Mother Teresaの生き方を彼女の語ったことばを通して知る＞とか＜King 牧師ほど、ことばの力を知っていた人はいません。それがどういうところに現れていたか考えてみよう＞といった目標を、＜関係代名詞 that の用法＞などに代えて書く日が来るのを実現しようじゃありませんか。」

そういった線に沿った授業案と、その指導の試みが現れはじめたのである。文法事項が大切でないとは言わない。しかしそれだけにとどまっていたのでは、英語教育にはならない。ことばの能力やコミュニケーションの本筋はメッセージを伝えることであるはずだからだ。伝えるべきメッセージの豊かな内容を、生徒に考えさせる授業を力を合わせて創っていくことを呼びかけたい。

特集「英語教育はどうあるべきか」Part 1

英語教育の根本とは何か(1)

新学習指導要領と NEW CROWN

森住 衛

(大阪大学教授)

1. はじめに

21世紀の幕が開いた。新しい世紀になったからといって、何かが大きく変わるわけではない。昨年からの年越しも、毎年味わっている通過点である。しかし……である。人間の営みの中で数字の大きな変わり目のときは、今後のことを改めて考えたい、何か新しいことをしたいと思うのが、人の常であろう。何かを考えたり、新しいことをする場合、一般には、これまでやってきたことの総括や評価をしてから行う。そして、この際に最も大切なのは「根本は何か」という問いかけである。これがないと時代の表層の変化に流されてしまう。本来の目的を失ってしまう。

折しも、学校教育は2002年4月から新しい衣を着ることになった。中学校の英語教育も新学習指導要領(外国語)によって提案された内容で新しい世紀に乗り出す。本稿では、このいわば「中学校英語教育丸」の船出を前にして、NEW CROWN と学習指導要領との関係、時代の変化に対する立脚点などを中心に、英語教育の根本は何かを考えてみたい。

2. 指導要領の理念と合致している教科書

教科書は学習指導要領に則って編集される。この学習指導要領との関係で、これまでのNEW CROWNを総括すれば、NEW CROWNは学習指導要領の理念を最も端的に具現してきた教科書といえる。極論すれば、学習指導要領の理念を先取りしてきたともいえる。まず、前者の具現という点から取り上げたい。古い話になるが、学習指導要領の目標欄で広く「外国の人たちの生活を扱う」とされていながら、英語教科書では長い間、外国の人たちを英語圏、特に英米人に限定して扱っていた。これは登場人物を見るとわかる。いわば主人公役ないし進行役の中学生は長い間、アメリカ

人の中学生という時代があった。その名前で一世を風靡した教科書もあった。これが大きく変わってきたのは、1978(昭和53)年度版のNEW CROWNからである。現在のように、日本人2名、そして英語圏、中国、ケニアの中学生というように、「外国の人たち」の配置に偏りがなくなった。日本人の登場人物を中心に上げてきたのもNEW CROWNである。今では何でもないようなことであるが、当時としては新しかった。そして、これも、日本人が積極的に英語を使っていくという学習指導要領の底流に流れる理念に合致したものであった。現在ではほとんどの教科書がこれに準じている。さらに、外国人に多様性が出てくれば、扱う地域も変わってくる。「国際理解」や異文化理解に必要なこの多様性も、NEW CROWNは、いち早く取り入れてきた。ケニアやシンガポールなどアフリカやアジアの国や地域を比較文化的な視点で本格的に取り上げたのは、明治以来NEW CROWNが初めてである。

「人」「地域」ときたら次は「言語」である。衆知のように、私たちが担当している教科は「外国語」である。新指導要領では必修になったが、「外国語が必修」という意味である。指導要領のこの理念は長く続いているが、表見返しや本文でこれを具現してきたのもNEW CROWNである。世界の言語という見返しで、英語を「科目」として学ぶが、広く外国語に興味・関心を持つという姿勢を出してきた。本文でも英語以外の外国語を出してきた。これは、指導要領の精神と合致している。

3. 指導要領の内容を先取りしてきた教科書

先取りしてきた例もある。今回の新指導要領では文字の草書体(一般に「筆記体」と言われてきているものであるが、この呼称は誤解を招く恐れがある)は「必ずしも扱う必要はない」としている。字体

については *NEW CROWN* では 1981(昭和 56)年度版から、楷書体(ブロック体)を第一義として、草書体は参考までに載せるという方針できた。そして、新指導要領ではそうだった。文字といえば、1年の LET'S START で、アルファベットを扱ってきたのも *NEW CROWN* の特徴である。いわゆるコミュニケーションの時代が来て、アルファベットを教科書本体の冒頭で扱うのは時代に合わないという意見もあったが、初版以来変わることなく本格的な扱いをしてきた。本格的な扱いというのは、見返しなどの扱いではなく、文字と音の関係を指導できるようにしてあるということである。新指導要領ではどうだろうか。当然ながら、文字指導の必要性は明らかにしている。文字は、これからの中学英語教育においても、ますます重要である。小学校の外国語会話の「聞く・話す」導入で、中学の英語教育のアイデンティティーのうちのひとつは文字指導である。現実的にもインターネットは電子メールでは文字を読んだり書いたりしなければならない。この点でも *NEW CROWN* は早くから現在の事態にも対応していたと言える。さらに、細かいことであるが、文法用語がある。すでに気づいておられると思うが、新指導要領には「未来形」という言い方がなくなった。つまり、「go は現在形、went は過去形、will go は未来形」などとしてきたのであるが、最後の「未来形」がなくなったのである。will は現在形である。そこで「未来をあらわす言い方」などになった。*NEW CROWN* の【文法のまとめ】や TM などでは、この「未来をあらわす言い方」を使っていて、「未来形」なるものは認めてこなかった。これも先取りの例といえる。

4. 時代を予測してきた教科書

指導要領だけでなく時代そのものを予測してきた。現行版でいえば 1 年 1 課の Kato Ken に見られる日本人の表記法である。すでにご存じの方も多いと思うが、先般(昨年 9 月上旬)に国語審議会が中間報告として、日本人名が英語など欧米語の中で使われる場合、これまでの「名 + 姓」でなく「姓 + 名」の順序で表したほうがよいという提言を出している。これは、NHK や民放のテレビやラジオでも放送され、さらに、11 月上旬に読売新聞および *The Daily Yomiuri* の社会面で取り上げられ

た。報道によると、現在、検定中の中学英語教科書の大半(7 社中 6 社)が 2002 年度からの新教科書で「姓 + 名」の順序を採用することである。*NEW CROWN* は、1993 年度版から本課本文でこの順序を採用してきた。さらに遡れば、1987 年度版の 2 年の LET'S TALK で Sato Goro と出している。つまり、10 年余以前からこの方式を提唱してきて、現在、教科書の大半がこのようになろうとしているのである。



Book 1, LESSON 1 1

なぜ *NEW CROWN* が「姓 + 名」の順序にしていたかは、本誌 31 号の拙論で多少とも詳しく触れたが、要約すると次の 5 点になる。

- 1) 姓名の表し方は、個人や民族のアイデンティティーの象徴である。できるだけ原名に近い表し方がよい。地図上の都市名、地名なども原名に近い表し方に移行しつつある。
- 2) 日本人が自己紹介などで「名 + 姓」を使うのは、異文化理解の本質にも反する。異文化理解の本質は「Difference is beautiful.」であるのに、出会いの最初から相手に合わせた言い方になってしまう。
- 3) 「名 + 姓」を基準にして、たとえば、Suzuki Taro という人が、My first name is Taro. などと言うのは、事実誤認で、日本人の最初の名前は Suzuki である。
- 4) 母語で「姓 + 名」の順序としているのは、東アジアの漢字文化圏やウラルアルタイ系の言

語圏に多いが、この中でその国民の大半が順序を逆にしているのは日本だけである。

5) <姓+名>の順序の方が、社会生活を行うにあたっては合理性に富んでいる。旅券の氏名の順も<姓+名>になっている。

先の読売新聞の報道にあるが、これは「利便性」が「アイデンティティー」かの問題で、是非論は分かれる。特に、個人の名前は各個人が決めることで、強制はできない。そのために、*NEW CROWN*では、英語式の言い方もあると添え書きしている。今後の趨勢としては、日本式の<姓+名>になっていくと思うが、要は、言語使用に関してはこの種のアイデンティティーや社会性の問題があるということを生徒に気づいてもらうことである。これまでは何も考えずに<名+姓>にしてきたきらいがあった。

5. 題材を強調してきた教科書

日本人名を Kato Ken のように<姓+名>の順序にするという提案は、最終的には、言語材料にどのようなメッセージを持たせるかという問題に行き着く。メッセージは題材内容である。*NEW CROWN* は、その最も大きな特徴として、1978年の初版以来、教科書本文の題材に最大の力点を置いてきた。ことばは、それがどんなに簡単な表現であれ、その中身が重要である。生徒たちは13歳から15歳の多感で精神活動が本格的に開花する時期にさしかかっている。たとえ、外国語であろうと、読んだり書いたりするものには、気づいたり、考えたりするきっかけを盛り込みたい。知的にも情緒的にもインパクトがあるものを提供したい。たとえば、現行版の1年の第1課は、Kato Kenの問題に続いて、もうひとつ題材の工夫を施している。トム(Tom)が、健(Ken)の机を指して Is this your desk? と聞き、Yes, it is と言われると、'Nice.' と反応する。一般にアメリカ合衆国の子どもは自分の机を持っていない。そこで、'Nice.' と言ったわけであるが、1年次冒頭の簡単なやりとりの中にまで、このような気づきや思考の「触媒」に資するものを入れている。内容が難かしいという向きもあることは承知しているが、このようなメッセージの内容がないと、本来のコミュニケーションは期待できない。また、新指導要領でも謳われて

いる「自ら考える力」の育成にも役に立たない。

一口に題材といってもその内容は広い。詳しくは本誌別稿を読んでいただきたいが、大別すると、ことばの教育に資する話題、異文化理解教育に資する話題、人間教育に資する話題の3つになる。本課や LET'S READ では、これらの3つをバランスよく扱うようにしてきたが、さらに、LET'S TALK や LET'S LISTEN などの「話す・聞く」言語活動にまで応用するようにしてある。これも、'How' とともに 'What' を重要視している *NEW CROWN* の方針の一環である。

6. おわりに

誤解を招くかもしれない。しかし敢えて言うと、*NEW CROWN* は「ラディカル(radical)」である。日本語の「ラディカル」は「急進的な」「過激な」などの意味で使われることが多いが、英語の 'radical' の原義は「根本に基づいている」である。'radish' は「(はつか)大根」で文字通り「根っこ」である。tradition も「根っこ」をもっているから「伝統」である。*NEW CROWN* は、これまで根本に関係することを、あるいは根本に存在するものを志向して、現場の先生方と共に歩んできた。根本にかなっていれば、表層の変化に対応できる。たとえば、*NEW CROWN* の3大理念は「ことばの教育」、「異文化理解教育」、「人間教育」であるが、これを初版から今日まで変えないできている。先に示したアルファベットの字体についての提案も、当初は「ラディカル」に見えたかもしれないが、根本にかなっているから、そこに収束しようとしている。これらは、根本を押さえさえすれば、世の中の多少の変化にも耐えられるという証左ではないだろうか。

中学校の英語教育は、2002年からは「週3時間」復活という苦しい状況で始まる。このときに「基礎・基本」をどうするかなどの大きな問題が出てくるだろう。このことについては、次号の本稿(2)で取り上げるが、基礎・基本は周囲の変化にいたずらに揺れ動くものであってはならない。これは、教科書の編集の姿勢にもあてはまる。英語教育の「根本」とは何か。これからも忘れないようにしたい。

特集「英語教育はどうあるべきか」 Part 1

「<聞く・話す>コミュニケーション能力」の育成

渡辺 時夫

(信州大学)

1. はじめに

過去3回の学習指導要領の変遷を見ると、聞く・話す能力の育成を強調し、「実践的コミュニケーション能力」の育成へと着実に進んできたことがわかる。この間、聞く能力と話す能力との関係が微妙に変わってきたことは注目に値する。昭和56年度の改訂では聞くこと・話すことというひとつの Kategorie として扱われていたものが、平成2年度の改訂では、聞くことが話すことから独立し、聞くことの重要性が一層強調された。しかし、聞くことの言語活動の内容は、「語句や文の意味を正しく聞き取ること。数個の文の内容(まとまりのある文章の概要や要点)を聞き取ること」など、聞くという活動を他の skills から切り離して考えるにとどまっていた。だが、実践的な言語使用場面では、テレビを見るなど特別な場合を除き、他の skills と関連して用いられるのが普通である。今回の改訂ではこの点がはっきり記述されている。

たとえば言語活動の欄で、聞くことと他の skills(話すこと、書くこと)との関わりが次のように記述されている。(下線は筆者)

<聞くこと>

質問や依頼などを聞いて適切に応じること。

話し手に聞き返すなどして内容を正しく理解すること。

<話すこと>

聞いたり読んだりしたことについて、問答したり意見を述べ合ったりすること。

<書くこと>

聞いたり読んだりしたことについてメモをとったり、感想や意見などを書いたりすること。

最近の言語習得に関する研究成果を考慮に入れると、コミュニケーション能力を育成するために

は、聞く機会を増やし、話す書くなど他の skills と関連させながら学習者主体の授業を進めることが肝要である。

さて、従来の活動が、機械的なドリルに偏りがちであった点も改めなければならない。コミュニケーション能力の育成にあたっては、学習者が「伝達すべきメッセージ」を所持していることが前提である。メッセージの中身は、中学生の知的レベルにふさわしいものでなければならない。題材の重視を標榜している *NEW CROWN* は、コミュニケーション能力の育成においても「メッセージ」性を最も重視して取り組んできた。しかし、内容が豊かで複雑なメッセージを理解したり、発信したりできるようになるためには、段階を追った合理的な指導が必要である。聞く力の育成には、英語学習を通して考える生徒を育てることが最も大切であり、そのために生徒の知識や感性を大切にしつつ、top-down approach を多用することが重要である。

次に、「聞く・話す コミュニケーション能力」の育成について、上記の考え方を *NEW CROWN* はどう生かしているか、具体例を挙げて述べてみたい。

2. 具体的な指導例

(1) top-down approach

(説明の大枠をつかむことから始め、次第に細かい情報を正確に聞き取っていく指導法)

listening speaking 2年生の教材から
ねらい

CD(テープ)で、3名の科学者に関する英語の説明を聞き、彼らの出身地や業績などを考える。

指導法

科学者に関する英語の説明を CD で聞き、だ

れのことを説明しているかを把握させる。それ以上の情報は求めない。(3名の科学者の顔写真と名前を与えておく 生徒にとってなじみのある科学者なので、あらかじめ説明の中身が予測できる 予測しながら聞くという習慣・方略を習得することは大切なことである)

CDを繰り返し聞きながら、科学者一人ひとりについて、ひとつずつ事実を明らかにしていく。次のように、考える視点を提示しておくとうい。

(a) 出身地 (b) 何を研究したか (c) 業績などと の課題を解決するために何度も聞く機会があり、全部では相当な量の input となる。たとえば Graham Bell についての説明は次のとおり。

The third scientist is from Scotland. He wanted to study sound. He made a machine to carry sounds. It was new and untested. One day he accidentally dropped water near it. He shouted, " Mr Watson, come here! Help me! " Mr Watson was far away. The machine carried the shout. This was the first telephone. Who is he?

説明に用いられたすべての語句を理解する必要はない。下線を施した語句に気づき、自分の知識を援用すれば問題が解決できる。

ベルの出身地や業績などがわかったら、speaking へと移っていく。(ペア・ワーク)

課題

G. Bell になったつもりで A さんと対話してみよう。(下線部は解答例)

A : Where are you from?

Bell : I'm from Scotland.

A : What did you study?

Bell : I studied sound.

A : What did you do?

Bell : I made the first telephone.

ペア・ワークのあと、余裕のある生徒には、Bell になったつもりで、(a)自己紹介をさせたり、(b)新たに有名人を選んで紹介させたりする。

(a)の例 : My name is Graham Bell. I'm a scientist. I'm from Scotland. Watson is one of my good friends. I studied sound. I made the first telephone and I became very famous.

このような指導を行えば、聞く活動を話す活動へとつなげる strategy も習得できると思う。

(2) brainstorming listening expressing creative ideas 3年生の教材から



Book 3, LET'S LISTEN 5

ねらい

シンガポールについて自分の知識を整理し、新しい情報を得ることにより、シンガポールに関する自分のイメージを変え、理解を深める。

指導法

地理的な位置、民族、言語、文化などの観点から自由に日本語で発言する(brainstorming)、

イメージが描けるようになった頃を見計らって、シンガポールに関する英語の説明を聞く。説明文の一部(解答欄に出ていない情報の部分)

People in Singapore can listen to the news in all the four languages. Singapore is a young country. It became independent in 1965. So it is only a little more than 30 years old.

聞いてわかることが主体なので、答え方そのものはやさしくし、マルチョイ式。

個に応じた反応もできるよう、「その他気付いたこと」を書き留める欄を用意する。解答は、日本語でもよいことにする(メモ程度でよい)。

既知の情報と新情報を組み合わせ、理解を深めること(考える力の育成)が期待できるだけでなく、英語での表現力とも徐々に関連させることが可能になる(聞いてメモを取るにより、音声表現に限らず文字表現の向上にもつながる)。

予想される解答

a young country, only 30 years old, news are given in all the official languages, Singapore is a democratic country, etc.

まとめた英文をグループ内で発表させることで互いに学び合い、視野を広めることができる。こうすれば 聞く ことから 話す 活動へ比較的自然的に、しかも楽しく移行することができる。

(3) speaking の活動

上の活動は主として < listening から speaking へ > という形だったが、**NEW CROWN** には 話す 活動を主体にした LET'S TALK という活動がある。文法が中心ではなく、「言語の使用場面」や「言語の機能」をクローズアップさせている。英語で表現しようとする、「こういう場合は何と言ったらいいだろう?」という発想が先に立つ。このような課題を解決する力こそまさに、実践的コミュニケーション能力なのである。たとえば「友達にポスター作りを頼みたい」のだが何と言ってお願いしたらいいだろう、とが「友達に物を借りたい」のだが何と言ったら貸してくれるだろうか、という場面で英語をうまく使えばコミュニケーションが成功する。このような力の育成を目指したのが LET'S TALK である。2年生の LET'S TALK 2 を例に挙げて、指導方法を説明してみよう。

Ken: I'm very busy now. I'm preparing the posters for Sports Day. Will you help me?
 Mukami: OK. What can I do?
 Ken: Please paint this picture.
 Mukami: May I use these brushes?
 Ken: Yes, please.

Book 2, LET'S TALK 2 モデル文

テープで対話を聞いたり、文字で読んだりして理解する。

次に、ペアを組んでロールプレイを行う。

どんな場面でどのような表現を用いることが望ましいかを実際の対話を通して学んだ後、次の基本表現を覚える。

1) A: Will you help me?

B: OK. / I'm sorry. I can't. (I'm busy now.)

2) A: May I use the brushes?

B: Yes, please.

下線部分に次の語句をあてはめて練習する。(やや機械的な練習になるが、これが基礎・基本の習得にあたる)

1) sit down / come with me / say that again

2) come in / borrow your bike / use the telephone

task を行う(実際の場面で、自分の本当の願いを聞き入れてくれる友達探しをする)。

まず、友達の助けが欲しいことがらを書き出し、その表現方法を次のように書き出してみる。

(a) teach math to me(Will you teach math to me?)

(b) join my club(Will you join my club)

自分の願いを受け入れてくれた人の名前(複数)をメモし、グループ内やクラス全体に発表する。

(例) Takao will teach math to me.

Mamiko will join my club.

授業の流れを次のように整理することができる。

モデル対話を聞く(読む) ロールプレイにより場面と表現の結びつきについて理解を深める 基本表現を複数覚える 実際の場面で自分の問題を解決するために覚えた表現を使ってみる。

小論の最初で述べたように、聞く 話す 読む などを関連させながら、コミュニケーション能力を育ていけるように工夫を凝らしている。

3. おわりに

紙幅に制限があり、一部の事例を扱っただけだが、上記の考え方と指導法により LET S LISTEN と LET S TALK を利用すれば、生徒の実践的コミュニケーション能力は飛躍的に向上するものと思う。

特集「英語教育はどうあるべきか」 Part 1

題材の内容とその取り上げ方

高橋 貞雄

(玉川大学)

1. 英語教育と題材

中学校の英語教育は、教科のひとつとして行われる。当然のことであるが、この点が最も重要であり、また見逃されやすい点でもある。現代社会の英語化現象の中で、英語の実用や効用ばかりが突出してしまうためである。たしかに、将来を担う人材を育成する上で「英語ができる人」を養成する意義は大いにあろう。しかし、もし本当に英語ができる人を育てるのであれば、900語と週3時間のしほりの中でどれだけことが保証できるであろうか。英語の学習で苦労した経験のある人や英語教育に携わっている人であれば、答えは自明である。

新学習指導要領では、外国語(英語)が必修になり「生きる力」「自ら学び自ら考える力」「基礎・基本」が総則として謳われている。したがって、公教育を受けるすべての子どもたちにとって必要な英語教育とはどうあるべきかを考えなければならない。また「生きる力」「自ら学び自ら考える力」の育成に英語教育として責任を負っていかなければならない。広義にとらえれば、基礎・基本は文法や単語の基礎・基本だけでなく「他者とのかわり(つまりはコミュニケーション)や社会で生きていくための基礎・基本をも包括する。つきつめて考えていけば、英語教育の目的は「人間教育」であり、子どもたちの成長をサポートすることなのである。したがって、英語教育は単に英語というモノを教えるだけでなく、英語という言葉を通じて人間や社会のあり方を教えていかなければならない。結局は「題材」の取り上げ方が英語教育のあり方に決定的な影響を及ぼすことになるのである。

2. 題材の種類とバランス

英語の教材として、題材を取り上げる場合にど

のように考えていけばよいだろうか。まず第一に考えなければならないのは教科としての性格である。英語は「ことば」である。ということは、ことばに関する題材を優先的に取り上げなければならない。とりわけ英語教育と国語教育は「ことばの教育」に責任を負っている。特に、ことばは「考える力」と密接にかかわっているわけであるから、教科としての責任は極めて重い。「ことばの題材」として取り上げる場合には、以下の3つの観点がある。1つめは、「ことばの認識性」または「記号性」である。私たちはことばを通して物事を考えたり理解したりする。つまりは、ことばとは何か、といったことに関する題材である。2つめは、「ことばの社会性」である。ことばと文化、母語と外国語、母語と民族といったことに関する題材である。英語を学ぶことの意義の多くは、こうした側面にかかわっている。3つめは「ことばの伝達性」である。通常の世界生活を営む上で重要になるいわゆるコミュニケーションの手段としての言語である。ことばの伝達性という点でいえば、手話言語も点字言語もこの範疇に入ってくる題材である。以上のようなことばに関する題材の意義をまとめれば、子どもたちの言語観を豊かにしたり育てたりする題材、ということになる。

外国語教育で果たすべきもう1つの大きな役割は、子どもたちの世界観を広げる、ということである。世界には、さまざまな国や民族や文化があり、したがって、さまざまな生活様式や考え方があり、そうした多種多様な社会の中で共存していくためには、お互いの人権を守ることや平和を維持していくことが必須の要件である。異文化理解とは、身の回りの異文化も含めて、お互いの違いを認め合いつつ共生の道を模索していくことである。英語の教材として、平和、人権、環境、異民族・異文化などの題材を取り上げる理由は、子ど

もたちの世界観を広げ、社会性の豊かな人間に育てるという「人間教育」に根ざしている。しかし、英語教育は平和教育や人権教育だけを取り立てて教える教育ではない。そうであれば、英語教育の外でもできる。英語教育においては、ことばの教育という大きな枠組みの中で、平和や環境問題が題材のメッセージとして展開されると考えたい。

3. 題材を取り上げる視点

ここで、英語教育の題材として題材を取り上げる際の切り口について、いくつかの角度から考察してみたい。

子どもの感性を啓発するか

題材はあくまでも子どもたちのためにある。大人の視点に立って、特定の教義を押しつけるような切り口であってはいけない。できるだけ子どもの視点に立った、子どもの感性を揺さぶるような題材でありたい。一見難しそうに見えても、子どもの感性で受け入れられる題材はいくらでもある。また、リアリティーのある題材ほど子どもの心に届く。その意味で、題材はできる限り実話でありたい。

発見のある題材か

題材は、馴染みがあり過ぎても目新し過ぎてもいけない。一見当たり前のような題材であっても、新しい視点や考え方が提示されれば、子どもたちにとって新しい発見へとつながる。たとえば、「英国」の題材で「1つの国に4つの国がある」といえば、子どもたちに考える視点を提供することができる。世界にはこんな生き方や考え方があるのか、と子どもたちが理解し、わが身を振り返られるようであれば、発見のある題材だといえる。

楽しい題材か

最近の子どもは(いつの時代もそうかもしれないが)楽しくなければ食いついてこない。問題は、楽しさの中身である。上で挙げたように、自分の感性を揺さぶられ、新しい発見があるような教材であれば、子どもは「楽しい」と思うであろう。是非そうであってほしい。軽薄な笑いだけが楽しさではないはずである。要するに「楽しさ」には思わず吹き出すような楽しさから世界観が変わるくらいの楽しさまで幅がある。したがって、楽しさにメリハリのある題材をそろえていきたい。

深化・発展のある題材か

題材は、表現のひとつのモデルである。教材で与えられた題材を手がかりにして、思考や活動を深化させたり発展させたりできる題材がほしい。たとえば、体験学習をレポートする題材であれば、それをひとつのモデルにして、自分でもりポートを作り上げるような活動へと発展させていきたい。また、中学生はその3年間に思想的にも社会的にも大きく成長する時期である。であれば、同じ題材であっても子どもたちと同様に深化・発展していくべきであろう。たとえば、題材として環境問題を取り上げるとしたら、1年生で扱う環境問題と3年生で扱う環境問題は自ずと異なるべきである。かりに1年生でリサイクルなどの身近な環境問題を扱うとしたら、3年生では地球規模の環境を扱うといったことである。さらに、環境問題について知る、学ぶといった題材から、環境問題の解決に向けて行動する、といった題材の深化・発展があつてよい。

言語活動に適した題材か

題材にさまざまな種類があるように、題材をのせる表現形式もさまざまである。たとえば、レポート、日記、スピーチ、インタビュー、ディスカッション、手紙、詩、など枚挙にいとまがない。題材には表現形式との相性がある。手紙の題材であれば、手紙の表現形式をとらなければならないし、スピーチであればスピーチの基本的なパターンに準拠しなければならない。いわゆる実践的コミュニケーションだからといって、対話文だけを扱うとしたら、題材のバラエティも深さも極めて限定的なものになってしまう。

4. 教科書の題材と自己表現

すでに触れたが、教科書の題材は読んで理解するためだけのものでなく、生徒の自己表現を引き出すためのひとつのモデルとしての働きをする。教科書の題材は、コンテンツとしてのモデルと、表現形式としてのモデルのふたつの役割を果たしている。現在の、そして今後の英語教育の大きな課題のひとつは、いかにして生徒の自己表現を引き出すかである。自己表現ということであれば、基本は対話文ではなく叙述文である。つまり、何かについて述べる、ということが自己表現の基本だからである。その意味で教科書の中の叙述文が果たす役割は極めて大きいと言わざるを得ない。

英語の表現形式の基本はパラグラフである，とよく言われる。最初は3文程度のパラグラフであっても，基本ができていれば徐々にきちんとしたパラグラフに基づいて自己表現ができるようになるであろう。その意味でも，教科書には良いパラグラフのモデルを提示するようにしていきたい。

5. 題材のとらえ方

ここで現在の教科書の中から，いくつかの題材を取り上げてポイントを紹介しておきたい。

本課(LESSON)の題材

・1年6課 Alice and Humpty

英国文学・文化のエッセンスをもっとも典型的に表しているものとして，アリスを取り上げている。ここでは特にことばの記号性の観点から，「名前に意味があるか」という点を問題にしている。



Book 1, LESSON 6 2

・2年8課 Ainu

異文化は外国だけでなく身近なところにもある

(国内異文化)という点から，アイヌ民族とアイヌ語の関係を取り上げている。ことばの社会性という観点から，母語の大切さを説き，「民族の命はその言語の中にある」ということばに題材のポイントを集約している。

・3年6課 I Have a Dream

人権教育の題材である。人種差別と戦い平等を勝ち得たキング牧師の人物伝である。世界の現実を知り，共生することの難しさや大切さを考えさせる題材になっている。表現形式としてはスピーチが取り上げられ，「暗唱」やレシテーションに最も適した教材だといわれている。

・3年 LET'S READ 3 Language - Life of a People

3年生の最後にことばの大切さをあらためて説いている。ウェールズや韓国に起こった言語的迫害の歴史を通して，民族にとっての母語の意味や母語維持教育の意義について考えさせている。最後の文の「ことばはそれを使う民族の命である」が題材の根幹をなしている。

LET'S シリーズの題材

題材は本課だけでなく，話したり，聞いたり，書いたりする活動にも関係がある。つまりコミュニケーションには，How だけでなく What も重要な役目を果たすからである。これは必ずしも内容を重くするというのではない。

・1年 LET'S TALK 6 「許可を求めるとき」

許可を求めるときには，許可の求めかたの表現形式とともに「求める内容」が問題になる。ここでは『星の王子様』の本とその簡単な説明とが題材になっている。

・2年 LET'S WRITE 3 「将来の職業」

「将来は農業をやりたい」という直前の本課のスピーチをモデルにして，自分でもスピーチの原稿を書いてみようという活動である。ここではスピーチの形式と職業について考えることが題材になっている。

・3年 LET'S LISTEN 4 「地球を守ろう」

初歩的なりスニング活動にも題材を盛り込むことができる。つまり，無味乾燥な聞く活動ではなく，中身のある素材こそが聞き取る活動にふさわしいといえる。ここでの題材は，環境問題であり，ステップを踏んで聞き取る活動になっている。

特集「英語教育はどうあるべきか」 Part 1

『ニュークラウン』を使った授業の特色

1年11課 We Are Partners

日 基 滋 之

(東京学芸大学附属世田谷中学校)

1. はじめに

現在使われている平成9年度版 *NEW CROWN* では3大理念として、「ことばの教育」、「国際(異文化)理解教育」、「人間教育」の3項目を掲げ、教材化をはかっている。このうち、「人間教育」については「英語を学びながら、子どもたちに生活や社会の問題、人間の生き方や社会の中の自分を考えさせる」ことを目標としている。

1年11課 We Are Partners 犬ってすごいねのテーマは「人間教育(障害者、動物と人間)で、各セクションのあらまきは次のとおりである。

[Section 1]

犬はペットとしてだけでなく、人間の手助けをしてくれます。久美のお父さんの友人の林さんは犬の訓練士です。久美は林さんに学校を案内してもらいます。

[Section 2]

林さんはアルバムを開き、腕を動かすことのできない女性のために、電灯をつけようとしている犬の写真を見せてくれました。

[Section 3]

久美は友人のムカミに、パートナードッグのことや車椅子の人々とその犬がパートナーであることについて話します。

Book 1 のカリキュラムでは、この課は1年3学期(1月)に扱うように計画され、4時間の時間配当である。

2. 「題材」内容をとらえるために

「障害者、動物と人間」をテーマにした1年11課 We Are Partners の題材では次の3本の柱を大切にしている。

- (1) パートナードッグを通して、身体障害者について考える。
- (2) パートナーとしての動物の意義を知る。

(3) 人間と動物の関わり合いについて考える。

『Teacher's Manual 解説と指導』(以下、TM)では、題材内容をより深く知るために、その「背景の知識」として、1)身体障害者の生活環境、2)パートナードッグ(partner dog)、3)パートナードッグの訓練、4)パピーウォーカー(puppy walker)、5)聴導犬(hearing ear dog)、6)老犬ホーム、7)人と動物との関わり合いについて説明している。このような資料の扱いはコピーを生徒に配布し、「Tさんはパートナードッグについてどのように思っていますか。その気持ちの表われている個所に線を引いてください」という課題を出すことで一層作品についての理解が深まる。

ひと通り11課の学習を終えたのであれば、TM p. 319「要点把握問題」にあるように、教科書を開かせ「この課の全体をもう一度読んで、パートナードッグが、からだの不自由な人を助けていることを示す文を2つ書き出し、みんなに発表しなさい」という課題もよいと思う。ぜひ *NEW CROWN* の題材に込められた精神を生かす課題を設定したいものである。

また、*NEW CROWN* には各学年にビデオ教材が用意されており、この課では、カナダのパートナードッグの訓練風景を見ることができる。背景の知識を知る上でビデオ教材を活用することは効果的である。ビデオの日本語(あるいは英語)の字幕が不要ならば、模造紙を帯状に切り、字幕部分を隠せばビデオの映像とナレーターの英語に生徒の神経を集中させることができる。

3. 「言語材料」の理解と定着のために

1年11課 We Are Partners に盛り込まれている主な言語材料は次のとおりである。

- ・規則動詞の過去形 肯定文 (セクション1)
- ・規則動詞の過去形 否定文 (セクション2)

・規則動詞の過去形 疑問文 (セクション3)

TM では、「文型・文法」として、課全体を見渡した上で「過去形」について指導上留意すべき点が述べられている。以下、TM から抜粋する。

「(1) 日本語では「～た(例：話した, 食べた), 「～んだ(例：かんだ, 踏んだ)【撥音便】, 「～った(例：触った, 腐った)【促音便】と、過去を示す形が比較的単純であるが、英語の場合はどのように種類が多い。一般的には -ed をつける。look looked (以下省略)」このような日本語と英語との比較を踏まえた説明の切り口は教師にとって興味深く読めるものと思う。

また、TM の各セクションの「語・句・表現の解説」では上述した主な言語材料に加えて詳細な説明が記載されている。教科書本文の各セクションで、生徒や教師が疑問に持ちそうな語・句・表現を拾い出して解説している。教師が図書館に行き文献で語法上の疑問点を調べるといった手間や時間を軽減してくれるものと思う。

私たちは生徒が言語材料を定着しやすいようにと、日夜、自作ワークシート作成に時間を費やすが、NEW CROWN には『Teacher's Manual 授業に役立つ活動例集』が用意されている。これは<言語活動を中心とした活動例>と<題材を中心とした活動例>に分けて編集してある。各課の TRY & CHECK を補う活動として利用できる。

さらに、各課の新出文型・文法事項の定着を図るために各学年に『アクティビティアイデア集』が用意されている。言語材料の導入後の練習や学習活動の復習の場面でコミュニカティブな言語活動を行う上で役に立つ。

4. 「言語活動」を組むにあたって

さて、題材内容のポイントをおさえ、言語材料を吟味し、次に授業をどのように組むかという段階になる。しかし何もかもすべてゼロから出発するというのは大変である。『Teacher's Manual 授業案集』(以下、TM)は、授業のアイデアを提供する目的で、部「定型授業案」、部「自由展開授業案」として多くの現場の教師により提案、執筆された授業案が収められている。この授業案集に込められたアイデアをもとに、生徒の実態を踏まえて、私たち教師一人ひとりの個性を加えて授業を行うように意図されている。

校務の合間を縫って授業のたびに新しいアイデアを生み出し実践を重ねていくことは大変なことだけに、すでに同僚によって用意された指導案を利用させてもらい、それに自分の個性を加え授業を構築していけるのは便利である。



Book 1, LESSON 11 2

以下の指導案は、TM pp.96-97 から抜粋した LESSON 11, セクション 2 の指導案の一部である。

| | 学習内容 学習活動 | 指導方法・留意点 | 評価・資料 |
|----|--|--|--|
| 復習 | ・一般動詞(規則動詞)の過去形の作り方 | ・教師が過去にしたことを過去形の表現を用いながら、発話していく。 [-ed]の発音を若干強調する | ・自作の絵(写真) ・前時の学習が定着しているか。 |
| 復習 | ・一般動詞の否定文 I did not ~. ・新出文型・文法 I did not visit my uncle's house yesterday. | ・数人の生徒にきのうあることをしたかどうか聞き、その応答に応じて、肯定文と否定文を使い分けて聞かせる。 例 Kenji watched TV yesterday. / Taro did not watch TV yesterday. etc. ・黒板に数人の生徒の名前(縦列)と動詞(横列)の表を書き、その動詞に相当することをしたかどう | ・肯定文と否定文の違いを聞き分けられるか。 ・ did not の使用に気がつか。 |

| | | | |
|-------------|---|--|---|
| 展 開 | <p>・新出語句 did, open, album, picture, turn, shout, explain, move, arm, need, turn on</p> <p>・本文の内容を理解する。</p> <p>・本文の音読練習をする。</p> <p>・言語活動:ペアワーク過去形の否定文を用いた表現～肯定文との使い分けに重点を置く。</p> | <p>か聞き表に ×で記入していく(準備～日本語で)。 ・生徒名を主語にして, したこととしなかったことを肯定文と否定文に使い分けて表現していく。</p> <p>・過去形の否定文として did not を用いることを, 現在形の do not と比較させながら説明する。 ・数人の生徒に表を再利用し, 肯定文と否定文を使い分けて, 話させる。 ・フラッシュカードを用いて, 文字と音声を確認させる。</p> <p>・宿題として調べてきた単語の意味を確認させる。 ・単語の発音練習をする。</p> <p>・本文を見ながらテープを聞かせる。(2回) ・ピクチャーカードを見ながら 本文を聞かせる。(教師) ・必要に応じて難しい表現の説明を入れる。 ・Q & A, T-F で内容を理解したか確かめる。</p> <p>・教師のあとについて読ませる。 ・各自で意味内容を確かめながら音読させる。 ・数人の生徒にモデルとして音読させる。</p> <p>・動詞(句)がいくつか(6～10)記入されたワークシートに, 自分がしたこととしなかったことをあらかじめ ×で記入し, パートナーに肯定文と否定文を使い分けて言っていく。聞き手は相手の話を聞き取り, 相手の欄に ×を記入していく。相互に行う。</p> | <p>・意味内容を理解した上で, 聞き取れているか。 ・否定文の作り方を文法的に理解できたか。 ・自信をもって話しているか。 *フラッシュカード ・文字の単位だけでなく, 単語全体として意味と発音を確認できるか。 *ピクチャーカード *テープレコーダー ・おおまかな内容を全体像として理解できたか。 ・集中して聞けたか。 ・大きな声で読んでいるか。 ・意味を理解しながら読めているか。 *自作ワークシート ・積極的に活動しているか。 ・正確に話し, 正確に聞きとっているか。</p> |
| ま と め | <p>・題材に関するもの</p> <p>・言語材料に関するもの</p> <p>・宿題の提示</p> | <p>・犬が人間社会にどう役立っているかまとめてみる。</p> <p>・「文法のまとめ」(p.99)で確認する。ワークシートをする。 ・本文を書き写し, 意味内容をまとめさせる。 ・次のセクションの単語の意味調べをする。</p> | <p>・本時の要点が理解できたか。</p> |

たとえば [学習内容 / 学習活動] の「本文の内容を理解する」(下線部分)では, 指導案の順序を変えて, ピクチャーカードを見せながら, 音声を通して内容を理解させた後, 最後に教科書を開かせテープを聞かせる方法もとれる。このように指導案を教師それぞれの考えや個性にあわせ修正して利用するのがよいと思う。また, このようにピクチャーカードを用いて本文の内容を口頭導入する場合には, TM の以下のオーラル・イントロダクションが役立つ。教科書を閉じさせ, ピクチャーカードを見せながら行う。

【オーラル・イントロダクション】抜粋)
Section 2

How do dogs help people? Look at the picture on p.81. What is the dog doing? Yes. It is turning on a light. It is switching on a light 「電灯をつける」. The woman in the picture can't move her arms (ジェスチャーで arm を示す)。

その後, 教科書(p.81)の欄外の Q & A を行う。

本格的にオーラル・イントロダクションを行う場合には, ピクチャーカードとその裏に書かれた詳細なリスニングインプットが役立つ。NEW CROWN には豊富な枚数のピクチャーカードが用意されており自作する手間が省けるので助かる。

5. おわりに

NEW CROWN の教科書には深い題材内容をもつ作品が多い。それだけに心に残るセンテンスも多く見受けられる。1年11課のタイトル We Are Partners やセクション3に埋め込まれている一文, They are partners. もそのひとつといえるかもしれない。

また, user-friendly な豊富な教材教具も NEW CROWN の特徴といえる。

本稿では触れられなかったが, Teacher's Manual には『授業案集(ティームティーチング用)』『Teacher's Book』『Teachers' Manual for ALTs』『LISTENING QUIZ & LET'S LISTEN 用 CD 指導用フロッピー』も用意されており, 私たちの日々の授業をサポートしている。

Writing New Crown

Thomas Hardy [Professor, Tamagawa University]

I am one of a team of writers of *New Crown*. During the writing process, one constant concern was how to reconcile goals that were seemingly at odds with each other. Writing the texts was a constant balancing act. How to engage students while at the same time entertaining them? How to have students encounter English in familiar situations while enlightening them about other aspects of English as a global language? During the writing process, I came to think of the goals as the six 'en-'s.

One basic goal was to engage students. One way to do this was through topics that interest them and are part of their lives. The idea, based on long experience teaching and the research of a number of scholars, is, that if the content of the books interests students, then they have an easier time learning English as a foreign language. Hence the chapters on school in the USA, and explaining aspects of everyday Japanese life and culture.

We also wrote so students could encounter the uses of English in familiar and realistic situations to help them learn basic functional skills. For example, this is behind the idea to link numbers and everyday life skills.

A third basic goal was to entertain students. It is widely recognized that students learn more and retain more when the materials and learning process itself is fun. So, we attempted to entertain through both the form and style of materials presented. For example, we selected a variety of games and toys for lesson topics. (See also the lessons on *Alice in Wonderland*; and the tie-in with a movie.) In another manner, we include music, incorporated into the text and as supplementary activities at the ends of the texts. The idea is for students to have a good time learning. They will then look forward to English classes and become better and more enthusiastic learners.

We also wished to enlighten students. The goal here was to introduce students to social issues that are shaping their lives in Japan and around the world. It was to provide a variety of role models for children to aspire to, and to break stereotypes. For example, this kind of thinking was behind the writing of the lessons on people with special physical challenges, the lessons on minority languages and cultures both in Japan and in other parts of the world and the lesson on Martin Luther King, Jr.

Another goal was to encourage students to learn English by having the book be doable. It is widely recognized that some students learn through linking physical activity with mental processes, an insight which is the basis of an entire school of EFL education, Total Physical Response (TPR). Acknowledging these insights, we have included units where students can build their own family tree, practice gestures, and perform tricks.

Lastly, we wanted to help student learn to enquire, help them to develop their critical thinking skills regarding a variety of issues, in English and in Japanese. These are issues that concern them now, in their immediate lives, and that will concern them in the future as they become citizens of Japan and the world. This impulse lead to the lessons about partner dogs and the importance of creating a barrier free environment, to the lessons in which a character in the text gives a speech about her dream, and a lesson in which a very real ethical dilemma is laid out in the reading on *A Vulture and a Child*.

Thought the six 'en-'s were not the only considerations that went into the writing of *New Crown*, they were certainly there. Explicitly or implicitly, they underlay most of the discussions and decisions made by the entire team of writers.